館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第7集

館林市大字堀工

下堀工道満遺跡発掘調査報告書

SHIMOHORIKU-DHOMAN

1983

館林市教育委員会

館林市大字堀工

下堀工道満遺跡発掘調査報告書

SHIMOHORIKU-DHOMAN

1983

館林市教育委員会

は　じ　め　に

館林市教育委員会
教育長　堀　越　　亘

学問は、科学の進展に伴って日夜進歩しています。

学問の進歩に伴い、新しい事実が日毎にあきらかにされています。又、１つの学問では解明できなかったことも、学問相互の連携により、クリアーできるといった事も増えています。

今まで事実のように考えられていたことが、別の角度から新しいメスを入れられたことによって、その根底からくつがえされるような事が多くあります。

私達人間をとりまく環境は、種々雑多であります。

この中に生きている人間というものを考えていくときに、ただ単に、歴史とか、民俗学とか人類学といったような単独の学問だけで研究するのみでなく、人間の棲息環境と一体に、総合的に考えてみなければならないはずです。

このようなことから、今回の発掘調査は、ただそこに遺跡があるかどうかということを確認するのみでなく、その時代の人々をとりまく環境といったものがどんなものであったか、それがどう変化して現在につながっているのか、未来につながろうとしているのかまでを含めて確認していくという新しい方向で行なわれました。

自然科学という新しいメスを入れることで、今まで考えられていた歴史観といったものに、新しい問題が提起されたわけであります。

調査にあたり、心よく御指導、御協力をいただいた諸先生方、諸機関をはじめ、作業にあたられました皆様方に深くお礼を申し上げる次第です。

昭和５９年３月３１日

例　　言

1. 本報告書は、館林市大字堀工地内に所在する下堀工道満遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、館林市（主管課　土木課）によって計画された準用河川茂林寺川河川改修工事に伴う、緊急発掘調査である。
3. 本発掘調査の主体は、館林市教育委員会であり、その組織は次の通りである。

教育長	福田郁司（58年11月まで）
〃	堀越　亘（58年12月より）
教育次長	島田勇吉
事務局	（館林市教育委員会　文化振興課　文化財保護係）
課長	鎌田正弘（58年6月まで）
〃	森田　茂（58年7月より）
係長	三田正信
社教主事	落合敏男
学芸員	岡屋英治（担当）
主事	石井洋史
調査補助員	寺内景子
作業員（調査・経理）	藤坂和延・恩田英男・越谷長男・寺田国雄・葭藤嘉亮・葭葉たか坂村フジ・橋本富司・吉田　洋・荻原　毅・大出和彦・川島孝夫・内田邦夫

4. 調査期間は、58年6月～59年3月まで行った。
5. 調査に伴う諸経費な土木課予算の 6,000,000 円である。
6. 本報告書の図面作成・トレースは、岡屋、寺内、藤坂が行い、写真撮影・文章・編集は、三田、岡屋、寺内、藤坂が行なった。
7. 本報告書のローム、撹乱、焼土等にはトーンを使用した。
8. 本調査の、火山灰分析は、群馬大学・新井房夫氏、花粉分析は、大阪市立大学・辻誠一郎氏、14C鑑定は、学習院大学・木越邦彦氏にお願いした。
9. 調査から報告書刊行にあたり下記の方々、諸機関に御指導、御協力、御教示いただいた。記して感謝いたします。（敬称略・順不同）

新井房光・辻誠一郎・木越邦彦・能登　健・小島敦子・徳江秀夫・群大新井研究室・大阪市大辻研究室・学習院大木越研究室・県文化財保護課・館林高校社会科研究部・館林女子校社会科研究部

本　文　目　次

はじめに …… 1
例　　言 …… 2
本文目次 …… 3
図版目次 …… 4
写真目次 …… 5
第Ⅰ章　調査に至るまで …… 6
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 7
第Ⅲ章　遺跡の土層 …… 13
第Ⅳ章　調査の内容 …… 15
　第Ⅰ節　調査の方法と経過 …… 15
　第Ⅱ節　遺　　構 …… 19
　第Ⅲ節　出土遺物 …… 23
　第Ⅳ節遺遺跡をとりまく環境 …… 32
　第Ⅴ節　遺跡出土の火山灰 …… 36
第Ⅴ章　まとめにかえて …… 38

図　版　目　次

第１図　周辺の遺跡 …… 9
第２図　館林の地勢図 …… 11～12
第３図　台地部分土層柱状図 …… 13
第４図　台地及び湿地の柱状図 …… 14
第５図　遺跡周辺現況図 …… 16
第６図　３・４トレンチ全体図及び遺構 …… 18
第７図　住居址平面図及び断面図 …… 19
第８図　遺構平面図及び断面図 …… 21
第９図　土器実測図 …… 23
第10図　土器拓影及び実測図 …… 25
第11図　石器実測図(1) …… 26
第12図　石器実測図(2) …… 28
第13図　レベル別遺物出土表 …… 29
第14図　遺物分布状態実測図（先土器） …… 30
第15図　遺物分布状態実測図（縄文以後） …… 31
第16図　茂林寺沼の縦断、横断地質断面図 …… 32
第17図　茂林寺沼の自然史 …… 33
第18図　茂林寺沼の土層柱状図 …… 36
第19図　台地上土層柱状図 …… 37

写　真　目　次

写真1　遺　跡　近　景 …… 6

写真2　遺跡周辺の代表的景観（湿原と池沼） …… 7

写真3　内陸古砂丘断面 …… 8

写真4　洪　積　台　地 …… 8

写真5　自　然　堤　防 …… 8

写真6　発 掘 風 景 (1) …… 15

写真7　ボーリング風景 …… 17

写真8　第1号住居址及び溝状遺構 …… 20

写真9　掘立て柱遺構 …… 22

写真10　土　　器　(1) …… 24

写真11　土　　器　(2) …… 24

写真12　石　　器　(1) …… 27

写真13　石　　器　(2) …… 27

写真14　茂林寺沼の後期湖沼期に栄えた水生植物の花粉 …… 35

写真15　調　査　風　景 …… 37

写真16　火山灰のサンプリング …… 37

第Ⅰ章　　調査に至るまで

館林市は、群馬県の内で最も東京に近い地に所在している市である。東武伊勢崎線急行で、浅草へは約1時間、東北自動車道で、浦和まで1時間と通勤可能な地であるため、最近住宅建設等のめだつ地域である。市街地は、現在南西方向に延びつつあり、茂林寺沼北岸は、最も宅地化の進む地域といえる。このようなことから、同沼には家庭用雑排水や雨水等の流入が多く沼の水質等の悪化が指摘されはじめている。

こうした理由から、昭和50年茂林寺沼への汚水流入を回避するため、本沼周辺の排水路整備が計画された。準用河川茂林寺川河川改修事業は、この計画の一つで、家庭用雑排水の流路設定のためである。

この河川の流路に、天然記念物及び、埋蔵文化財の包蔵地が一部含まれていることから、市教育委員会は、文化財のとりあつかいについて開発部局と調整を行うとともに、県教育委員会と協議を行ってきた。

本計画は、茂林寺沼への水系等に大きな影響をあたえるものと考えられるものの、前述の通り、同沼への家庭用雑排水・雨水の流入を防ぐことを1つの目的としている。いわば、文化財の保護策の1つとも考えられる。

このようなことから、市教育委員会では、本計画について開発部局と調整をはかり、水系等工事による影響調査すること、埋蔵文化財包蔵地については記録保存を計ること、工事に際しては工法等を考慮することを要請した。今回の開発行為はやむをえない開発行為として考えられることから、上記理由をふまえ、下堀工道満遺跡の発掘調査を、市教育委員会にて実施することとして土木課と協議が成立。昭和58年7月より調査開始となった。

写真1　　遺　跡　近　景

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

本遺跡は、館林市街地の南方、東武伊勢崎線館林駅のほぼ3㎞の所に所在する縄文時代の遺跡である。

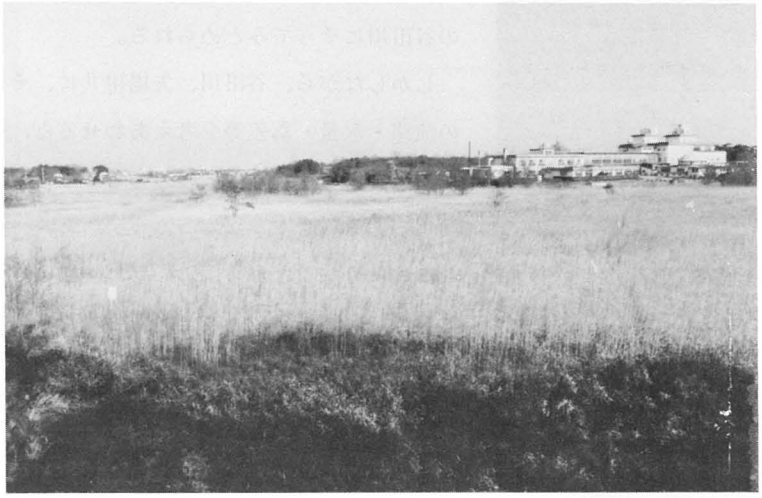


写真2　遺跡周辺の代表的景観（湿原と池沼）

本市は、関東地方のほぼ中央部、群馬県でいうなら、東端に位置する人口7万余の都市である。

本市周辺は、標高16～33メートルと、内陸部にあっては比較的低い土地であり「群馬の水郷」とも「内陸の水郷」とも呼ばれている地域である。

これは本市が、関東構造盆地中に含まれており、北及び南を流れる渡良瀬川・利根川という両大河の影響をうけて形成された地形であるためである。

本市の地形を概観するならば、大きく洪積台地と沖積低地からなりたち、その比率はほぼ1：1の割合である。

洪積台地は、千代田・大泉・館林・板倉へと延びる低台地で現水田面からの比高は館林付近で5～1ｍを測る。又西から東へ向って緩傾斜しており、大泉付近で標高35ｍ、板倉では、標高16ｍ程になる。

この洪積台地は、河川運搬物の上に中部・上部ロームを載せその形成は下末古海進時までさかのぼるといわれている。

この台地の両端に沿って、千代田町古海から、館林市高根まで内陸古砂丘が存在し、これは古利根川の自然堤防が基になったといわれ、日本最古、本州最大のものであると考えられている。砂丘上には洪積台地と同様、中部・上部ロームが載っている。

台地の北側及び南側には、沖積低地が広がる。沖積地は北側が渡良瀬川、南側が利根川によって形成されたものと考えられる。

沖積地中には、数多くの自然堤防と、旧河道を観察することができる。

写真3　　内陸古砂丘断面

写真4　　洪　積　台　地

写真5　　自　然　堤　防

旧河道は、北側の沖積地中に確認され、幅10m前後、現水田面との比高1～2mであり、旧矢場川の河道と考えられる。

自然堤防は、この旧矢場川及び台地南側の谷田川にそってみとめられる。

しかしながら、谷田川、矢場川共に、その流路・水量・落差等を考えあわせると、自然堤防を形成するほどの力をもたない中河川である。

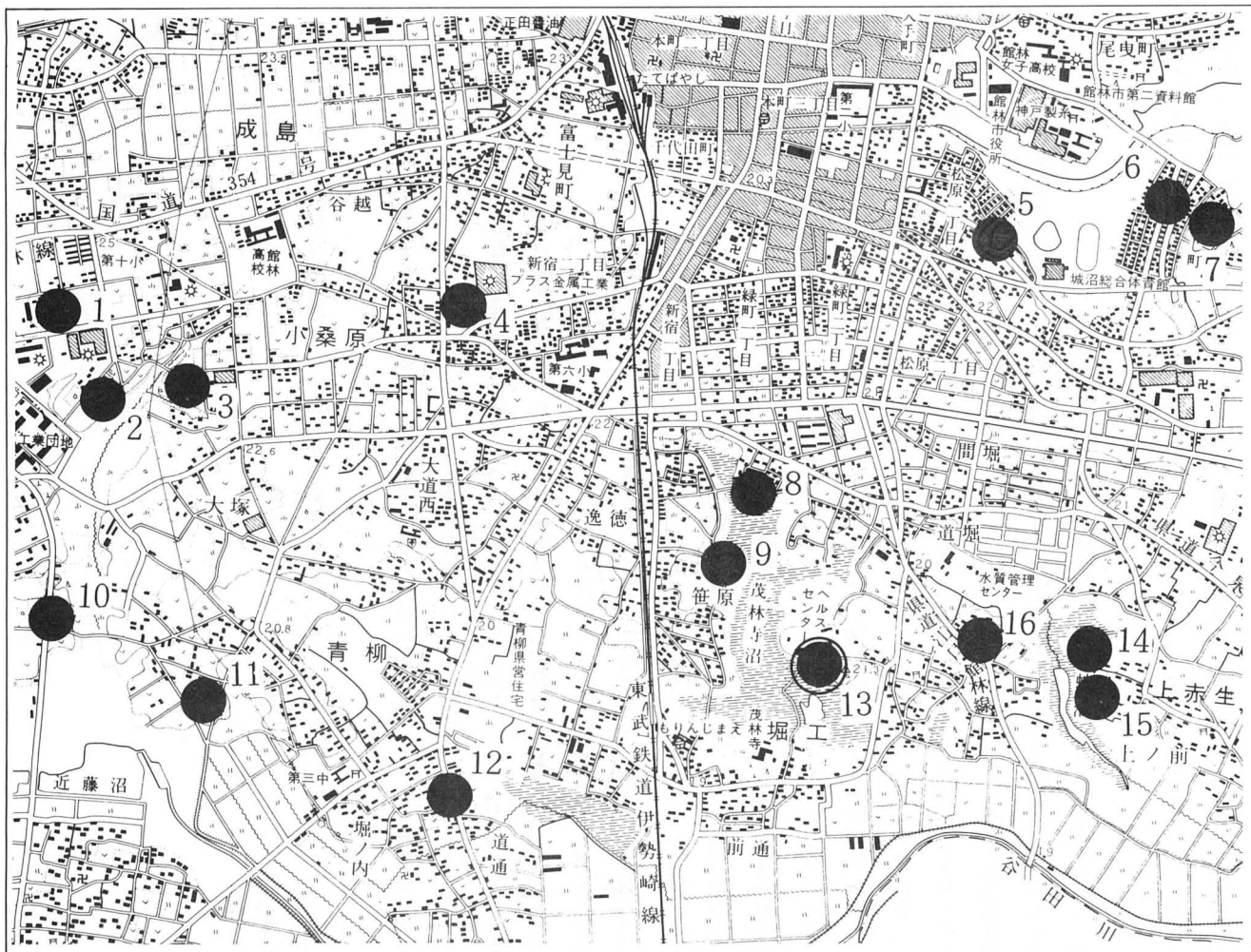
このようなことから、この自然堤防は、渡良瀬川・利根川によって形成されたものであり、矢場川・谷田川は比較的新しい時期の河川であると考えられよう。

洪積台地と沖積低地は複雑に入りくんでおり、その接点部谷頭には、茂林寺沼、蛇沼、東沼、近藤沼、城沼といった池沼や、谷地が多数存在する。この池沼及び、谷地の形成には、自然堤防形成が大きく関与していることが、今回の茂林寺沼等のボーリング結果から推察される。

遺跡は、市街地南部にある茂林寺沼の、北岸に位置し、昭和48年刊の群馬県遺跡台帳によれば、台地上から湿原部分に広がるとの記載がある。

遺跡ののる台地は、茂林寺沼北岸に位置する幅140m、長さ300m程の広い舌状台地である。

遺跡はこの舌状台地の南斜面から茂林寺沼北沿岸の湿地帯に広がっている。



1. 内藤障子遺跡
2. 伝右衛門遺跡
3. 北小袋遺跡
4. 富士嶽神社古墳
5. 屋敷添遺跡
6. 三軒屋遺跡
7. 大袋Ⅱ遺跡
8. 腰巻遺跡
9. 笹原遺跡
10. 近藤第一地点遺跡
11. 苗木遺跡
12. 青柳城跡
13. 下堀工道満遺跡
14. 間堀遺跡
15. 〃
16. 大原道東遺跡

第1図　周辺の遺跡

市内の遺跡を、昭和48年刊の群馬県遺跡台帳及び、発掘資料から見てみると、池沼や河川によって時代的にグルーピングできる。

本遺跡は、茂林寺沼、蛇沼沿岸に所在するグループに考えられ、このグループは、縄文時代前期～後期特に、中期～後期の遺物を出す遺跡が多いことが特徴である。

周辺の遺跡をみてみるならば、縄文前期の遺物を出す腰巻遺跡(8)、笹原遺跡(9)、間堀遺跡（14・15）、縄文時代中期の遺物を出す笹原遺跡、本遺跡（13）、大原道東遺跡（16）、間堀遺跡、後期の遺物を出す笹原遺跡、本遺跡、大原道東遺跡、晩期初頭の遺物を出す大原道東遺跡がある。

特に、大原道東遺跡は、後期において特徴的な遺跡である。

本地域北側に位置する城沼周辺は、縄文時代早期～中期の遺跡、古墳の多い地域である。又本地域西側の近藤沼周辺は、古墳時代の集落の多い地域である。

本市において、中期～後期にかけての遺跡が集中するのは、この茂林寺沼、蛇沼沿岸のみであり、旧矢場川沿岸にも後期の遺物を出すグループがあるが、こちらは中心が中期である。

昭和48年刊の群馬県遺跡台帳登載の遺跡は、比較的遺物の分布の濃い地域のみを登載した傾向がみうけられる。本年度より市では、分布調査を新に実施しているが、この分布調査によれば、本地域には、まだ相当数の遺跡が、未登載のままである。

この分布調査によれば、茂林寺沼周辺の台地上には、縄文時代と奈良・平安・中世以後の遺物が確認されている。

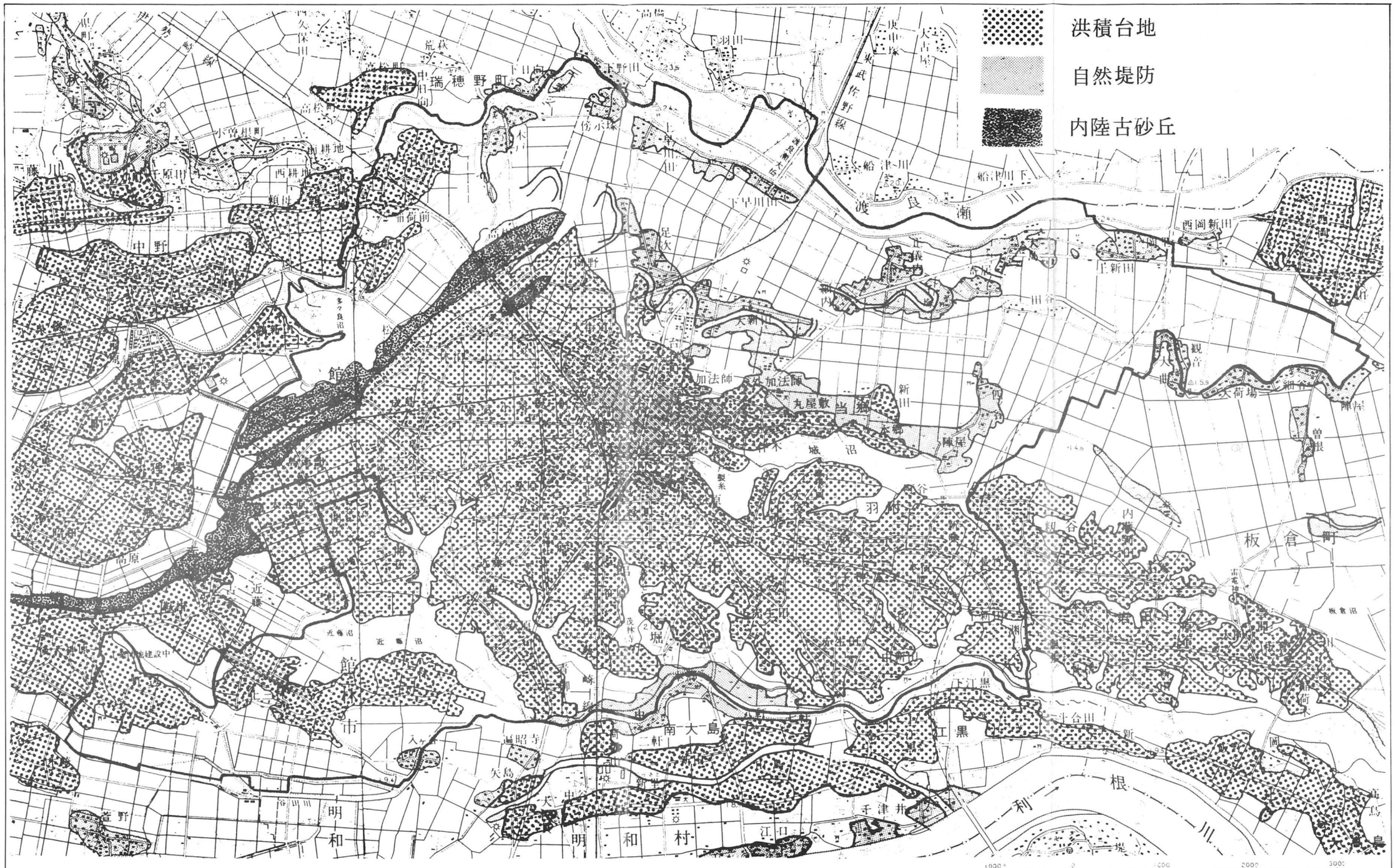
この遺跡の分布を後で述べる茂林寺沼周辺の環境に合せて考えるならば、茂林寺沼を中心とする人間の動きがある程度予測できるであろう。

館林地方は、人間の生活環境と、水との関わりが明確に表われる地域である。

内陸部の水郷は、水が余り過ぎている状態にある。水を引けば開ける地域とはちがい、生活範囲を広げるためには、悪水をいかに排除できるかという状況にある。

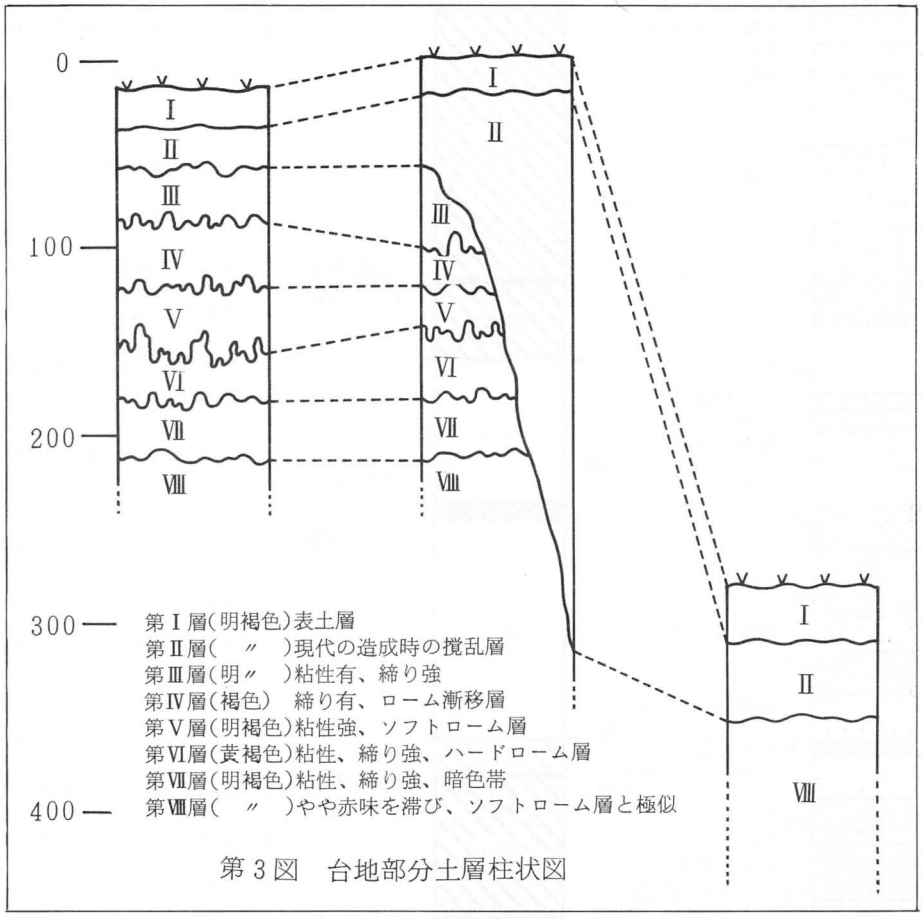
悪水を排除することは、水を引くことより、困難であり、湿地帯に水田耕作を営むには、相当の苦労を要する。

このようなことを考えて行くとき、茂林寺沼周辺においての分布調査の結果と、その自然環境を再度チェックしなおす必要があろうと考える。


洪積台地
自然堤防
内陸古砂丘
瑞穂野町
渡良瀬川
館林市
明和村
利根川
羽附
南大島
江黒
板倉町
堀
中野
1000
0
1000
2000
3000

第２図　館林の地勢図

第Ⅲ章　遺跡の土層

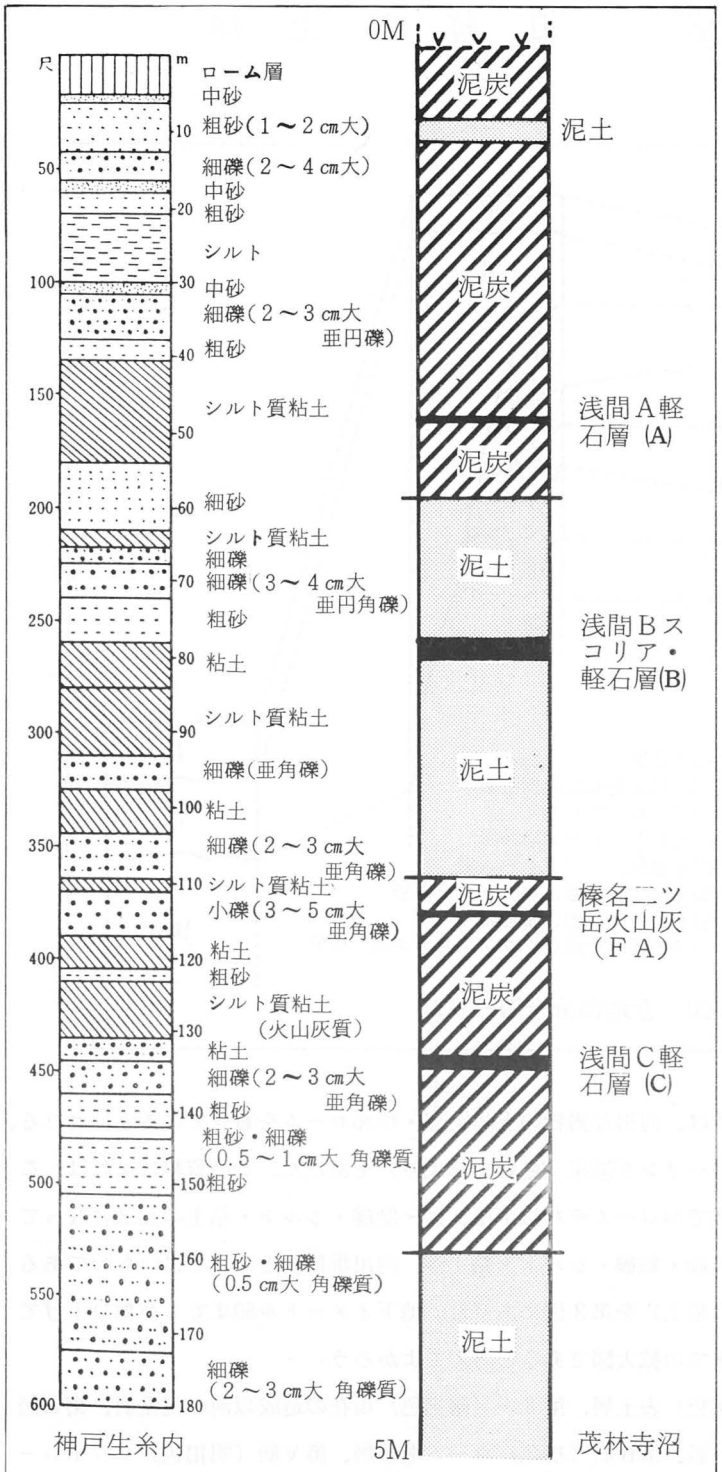


第３図　台地部分土層柱状図

館林・邑楽合地の洪積台地は、河川運搬物の上に上部・中部ロームを載せているといわれる。第４図に神戸生糸工場内のボーリング結果（館林史誌より）をあげた。この資料によれば、この地点では、表土から５ｍまでがロームそれ以下は、砂・細礫・シルト・粘土の互層になっている状態が読みとれる。この砂・細礫・シルト・粘土が、河川堆積物と考えて良いものである。

本遺跡での土層柱状図（台地上）を第３図にあげた。地下３メートル50までしか掘り下げてはいないが、第４図の５ｍまでの拡大図であると考えてよかろう。

土層状態は、第Ⅰ層（暗褐色）表土層、第Ⅱ表（暗褐色）現在の造成以前の撹乱層、第Ⅲ層（暗褐色）粘性・締りの強い層、第Ⅳ層（褐色）ローム漸移層、第Ⅴ層（明褐色）ソフトローム層、第Ⅵ層（黄褐色）ハードローム層、第Ⅶ層（暗褐色）暗色帯？第Ⅷ層（明褐色）ソフト



第4図　台地及び湿地の柱状図

ローム極似層となっている。

これらの土層のうち、ローム層にあたるものは、第Ⅴ層以下で、中に一枚の暗色帯をはさんでいると考えられる。

又、第Ⅶ層土面につぶの荒いガラス質粘子がみられＡＴ（給良丹沢パミス）と考えられる。

又、今回の調査では、湿原部のボーリングも行なわれており、第Ⅳ図に柱状図を示した。

これによれば、台地上には確認できないが、火山灰層が確実にとらえられている。

この火山灰は、上からＡ、Ｂ、F_A、Ｃであり、厚さは薄いもののプライマリーにそろっている。

台地上における遺物のプロットから、本遺跡の遺物の出土が多い層は、Ⅳ層からⅤ層であった。

火山灰、遺物の出土レベルについては後でくわしく説明したい。

第Ⅳ章　　調　査　の　内　容

第Ⅰ節　　調査の方法と経過

次に調査の方法と経過を順をおって説明したい。

本遺跡の発掘調査は、茂林寺川河川改修にともない下堀工道満遺跡の一部が、工事区域に含まれることから、記録保存の処置をほどこすものとして、実施されたものである。

この工事区域には、別の文化財（天然記念物）が含まれているため、調査は頭初から困難をきたした。又、下堀工道満遺跡は、台地上だけでなく、湿地部分にも広がっており、調査方法について、様々検討しなければならなかった。

調査方法は、単に遺跡地のみの発掘調査にとどまることなく、天然記念物調査、環境影響調査の参考ともなりえるような資料を収集するものとして総合的に調査することとした。

このようなことから、台地上、湿原部分の２通りの方法を検討した。

基本的には、台地上にはどのような人間生活の痕跡があるのか、それをとりまく環境はどうであったのか、人間生活はどう変化して行ったのか、それにまつわる気候や環境はどうであったのか等を確認しうる調査を行うこととした。

台地上は、考古学を対象とした通常の発掘調査を実施する。これによって、台地上に住みついた人間の痕跡を追求すると同時に、確認された遺物から時代性を追求する。

又、周辺の分布調査の結果から、茂林寺沼をとりまく人間行動の一端を考える。

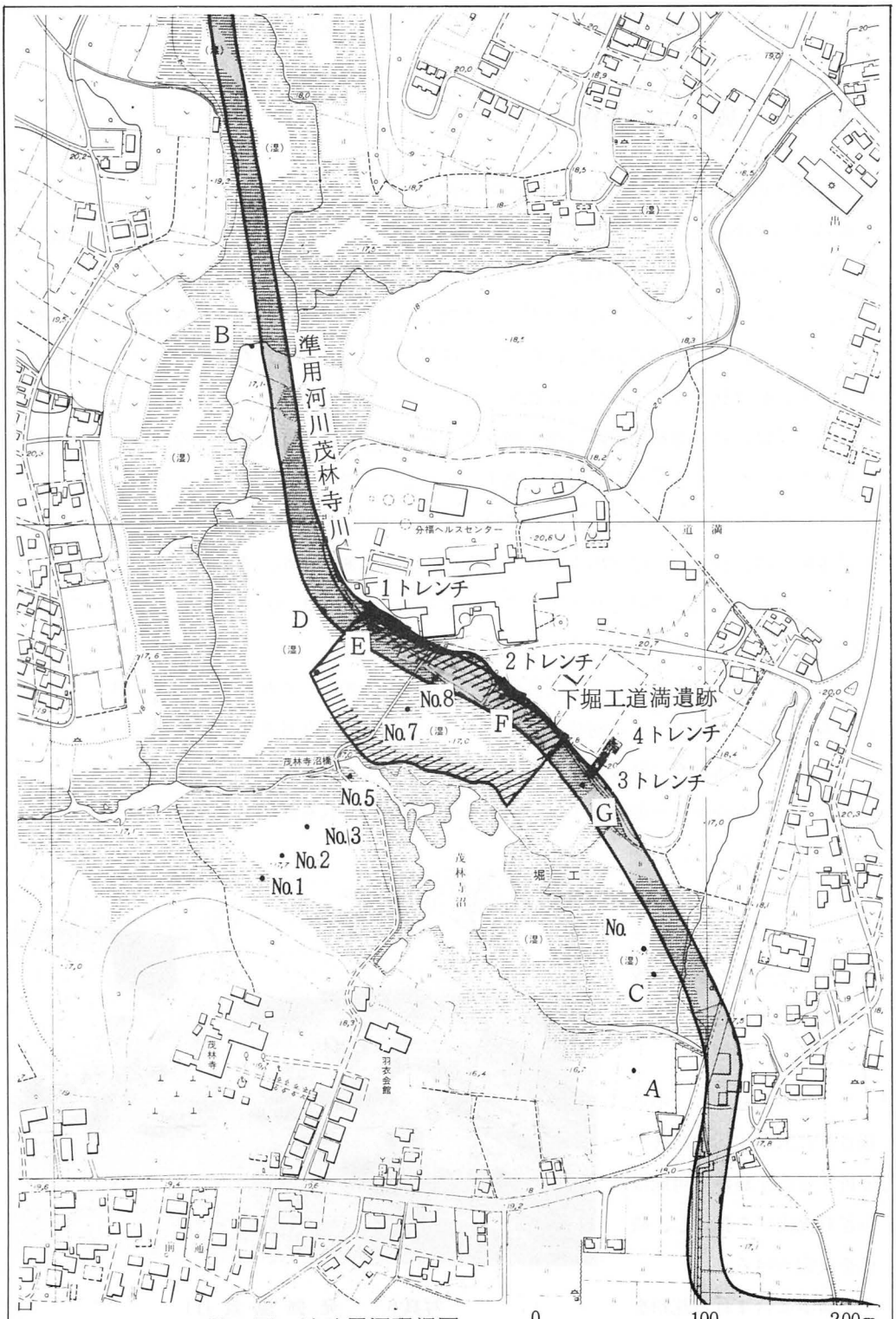
遺跡の土層断面から可能なかぎり、火山灰を採取し、時代を決定づける。

湿原部については、直接発掘調査は実施できないため、シンウォールサンプラーにより土のサンプルを取り、湿原部の土層について調べる。

サンプルをもとに、沼に残された人間生活の痕跡を分析する。土層から可能なかぎり火山灰を採取し、時代を決定づける。

土層中に含まれる花粉を

写真６　　発 掘 風 景 (1)


準用河川茂林寺川
B
D
E
F
G
A
C
1トレンチ
2トレンチ
下堀工道満遺跡
4トレンチ
3トレンチ
No.8
No.7
No.5
No.3
No.2
No.1
No.
分福ヘルスセンター
茂林寺沼橋
茂林寺沼
堀工
茂林寺
羽衣会館
道満
0
100
200m

第5図　遺跡周辺現況図

分析し、気候変化・環境変化について調査する。採取された泥炭を14C測定し、絶対年代を決定する。これらをもとに、茂林寺沼の形成過程を考える。等、可能なかぎり、総合的なデータを収集する方法をとった。

このように、今回の調査は、考古学だけでなく、地質学・生物学等の連携が必要となったため、群馬大学新井房夫氏、大阪市立大学辻誠一郎氏の御協力をお願いした。

又、台地上の発掘調査は夏場の7月から、湿原部分については、乾期である10月以後に実施することとした。

台地上の発掘調査は、河川改修部分に含まれる地域にトレンチを設定し、掘り上げることによよって、遺物・遺構の確認を行った。

トレンチは、舌状台地の先端に近い部分より1，2，3トレンチとし、遺物の出土状態から拡張した部分を4トレンチとした。

トレンチは、1辺3 mのグリットを利用し、地形にあうように設定した。

調査は斜面の部分が多かったために困難を要した。

湿地部分の調査については、5 mの手作業によるシンウォールサンプラーを用いた。

5 mまで、手作業によるサンプリングを行い、それ以下は、機械ボーリングによって、サンプリングを行った。

以下経過を簡単に記すこととする。

昭和58年4月～6月　調査準備

土木課と調整、調査方法等を検討する。

昭和58年7月8日　臨時議会にて調査費用組みかえ案議決。

7月8日　調査開始。

7月8日～12日

トレンチ設定、表土剥ぎ開始。

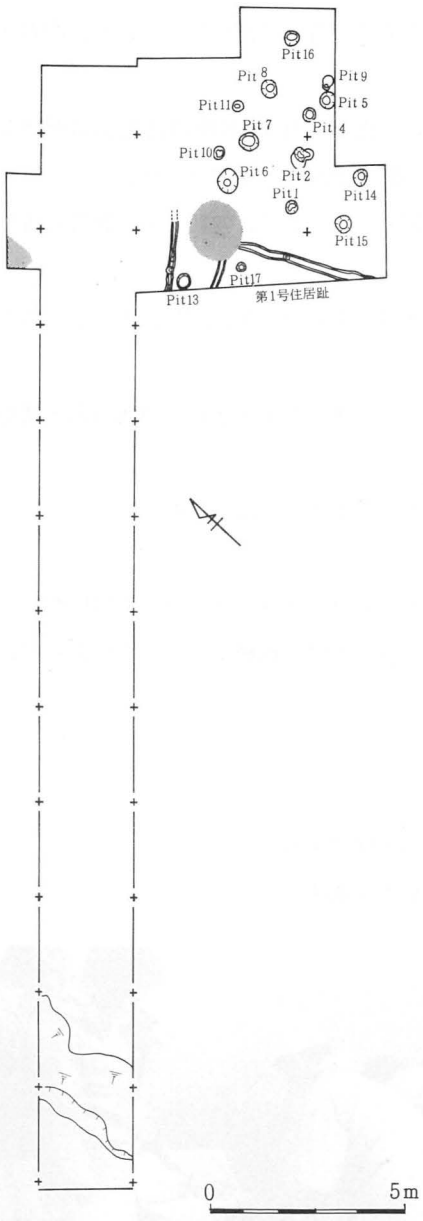
7月12日～7月30日　3トレンチ表土剥ぎ。

7月20日～8月3日　2トレンチ表土剥ぎ。

8月3日～10日　1トレンチ表土剥ぎ。遺物が出土しはじめる。

8月10日～8月20日　遺物

写真7　　ボーリング風景



第6図　3・4トレンチ全体図及び遺構

検出作業。4トレンチ表土剥ぎ。

8月10日～20日　4トレンチ遺構検出。

8月15日～8月30日　遺物、遺物図面作成遺物取り上げ。

8月30日～9月10日

遺物上げ、遺構調査、図面作成をくりかえす。

9月10日～9月13日

セクション図作成、遺構図面等作成。

9月14日　現場終了、プレハブ、器材のかたづけ。台地上の調査終了、ひきつづき、遺物等の整理へ。

9月14日～2月30日

遺物・図面整理。

9月22日　新井教授、辻教授現場来訪。

9月22日　湿原部調査開始。

12月5日～12月9日

シンウォールによる土層サンプリング。

12月20日～12月10日

新井・辻研究室にて資料分析。

1月24日～1月31日

機械ボーリングにて、土層サンプル採取。

2月2日～2月3日

新井教授、辻助教授来訪。ボーリングサンプルより、花粉サンプル、火山灰サンプル採取。

3月10日～3月20日

現場うめもどし。

3月20日　調査完了。

第Ⅱ節　遺　　構

第1号住居址

本住居址は、4トレンチ南西壁際に確認された。確認面は、ローム層であるが、トレンチ掘削時に重機を用いた為に、早期の確認が困難であったのと、近年の造成時及び木根による撹乱が著しく、残存状態は良好とは言い難い。

確認時には、かろうじて壁溝及び床面の一部、柱穴1基のみと言う形状で検出された。

確認範囲も、住居の約4/5程度が調査不可能な区域にかかっていた為に、東壁と北壁の一部を確認、調査したにすぎず、全容を明らかにすることはできなかった。

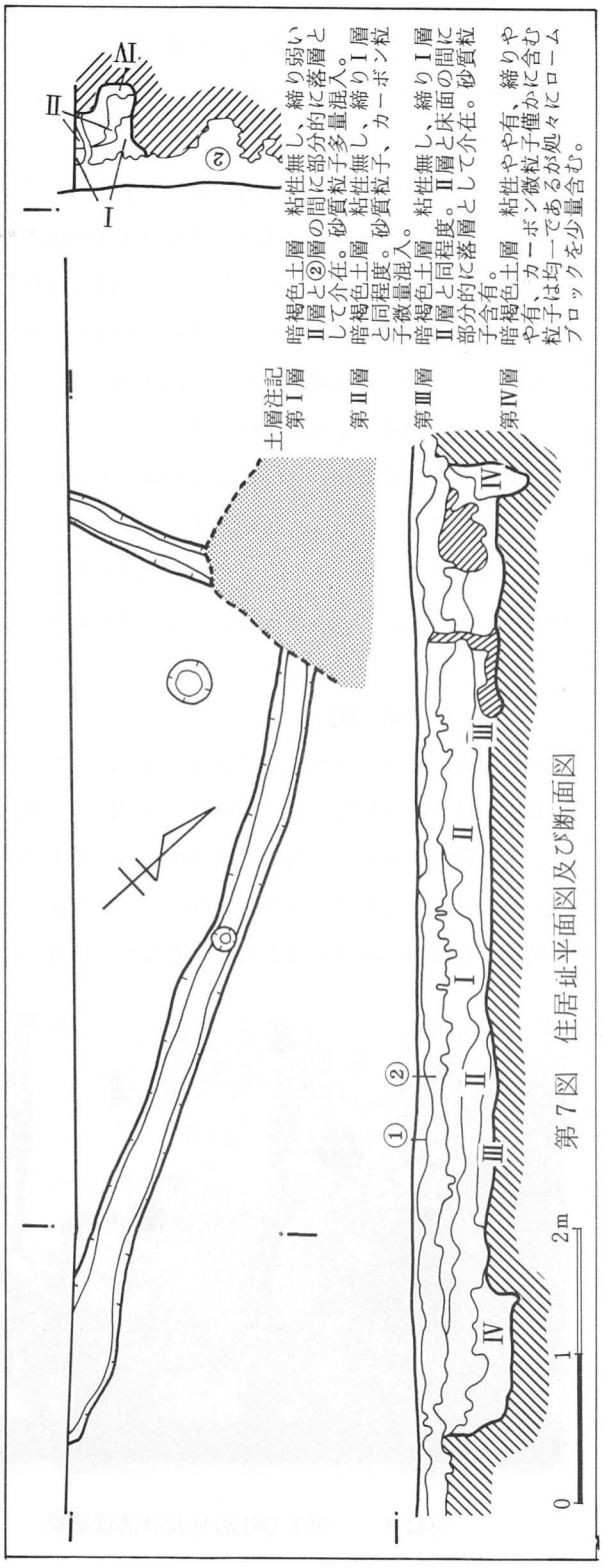
確認状況は当初、小規模の溝址であろうと想定したが、精査の結果、柱穴及び床面の一部が確認されたことにより、住居址であることが判明した。

トレンチ壁面に見える本住居址覆土断面から推察するのに、壁はほぼ垂直に立ち上がっていたことが判る。

その残存部分の壁高は、約30㎝を計ることができる。壁溝は、両壁共に見られ巾、深さ共に一定して走行している。

巾は20㎝程度、深さは8㎝程度を計る。東側壁溝内に、小柱穴が検出された。

床面は、中央寄りの部分に踏み堅め



第7図　住居址平面図及び断面図

た面が一部見られ、全体的にほぼ水平である。

柱穴は、北側隅の1基のみ確認した。規模は、径22㎝、深さ46㎝を計り、住居柱穴としては小規模である。

残存部分の形状から、本住居址は正方形又は、長方形を呈し、四隅に4本、あるいはそれ以上の柱穴を持ち、周囲には壁溝、住居内には中厨施設として炉又は、カマドを有すると思われるが、あくまでも推察の域を出ない。唯一確認された北隅のコーナーも撹乱で破壊されているが、周囲の容相から、鋭利に切り込まれていることが想像される。

覆土中の遺物は、極めて少なく上層付近から土器片十数片、壁溝中から石器類数片の出土が見られたが、遺構に伴うかは疑問である。

覆土の堆積状態は、レンズ状で自然堆積の容相を示し、特徴として北側から多量に流入していることが判る。層位はⅣ層に分類できる。

撹乱土及び②層中、覆土等から少量ではあるが、平安時代、国分式に相当する土器の出土が見られたことから、同時期に構築された住居であることも考えられる。

溝 状 遺 構

本遺構は、4トレンチ北壁に断面を残し、南に伸びる形状で確認された。

確認面はローム層である。規模は、巾 15 ㎝、深さ 5 ㎝を計り、溝中に小規模の柱穴遺構が、数基確認できる。形状は、南西壁から、北東に向い直線上に伸びている。長さは、 2 m 20 ㎝を計ることができるが、先端は不明瞭な線となり消滅している。他に4トレンチ表土剥ぎ時に、同規模の溝状遺構と思われる線が、断続的に確認されていたが、非常に不明瞭で処々が撹乱で破壊されており、最終的に遺構として調査することができなかった。

これらは、1号住居址の壁溝と極似していることから、周辺に数基の重複する遺構があったことも考えられる。

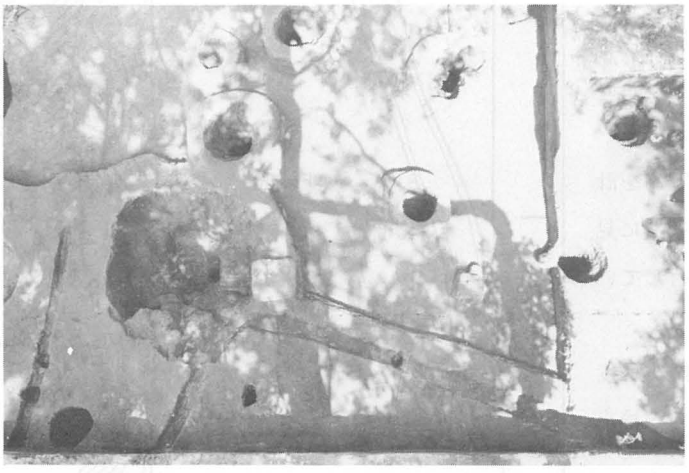


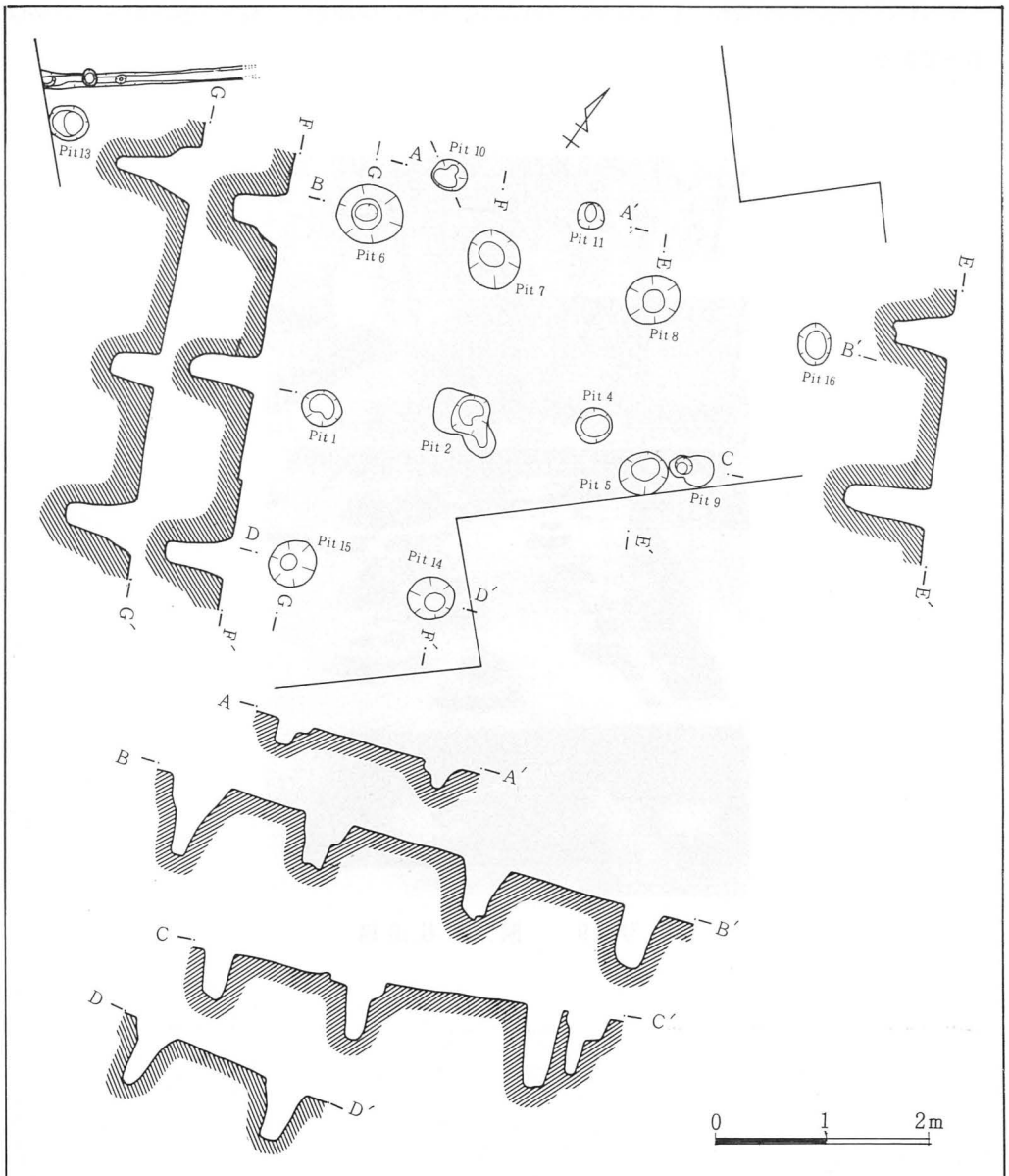
写真8　　第1号住居址及び溝状遺構

掘立て柱遺構

本遺構は、4トレンチ中央より南寄りの部分に確認された柱穴群であるが、その配列、間隔等に一定の規則制が見られることから、掘立柱遺構と考えることができる。

確認面はローム漸移層である。

規模は、各柱穴に大差なく、主柱穴と思われるpit1、pit2、pit5、pit6、pit7、pit8、



第8図　遺構平面図及び断面図

pit 14、pit 15、pit 16は径 45 ㎝程度、深さ60～70㎝程度と一定している。

1.7 m～ 2 mのほぼ一定間隔を置いて、南北に3列、東西に4列の方形区画で確認され、2間×3間の掘立柱遺構としてまとめることができる。

遺物、その他の時代決定の参考になるものは見られず、調査区に限定があった為、遺構としての広がりは不明である。

その他、周辺には小規模の柱穴群が見られたが、並列、間隔等に一貫性が見られず、性格は不明である。

写真9　　掘立て柱遺構

第Ⅲ節　出土遺物

土　器

本遺跡における遺物分布は、規則性、方向性を持たず、特に土器に関しては、そのほとんどが小破片に過ぎず、顕著な集中は見られなかった。

その種類も、縄文時代早期～後期、古墳時代鬼高期～陶器に至るまで、種々雑多である。

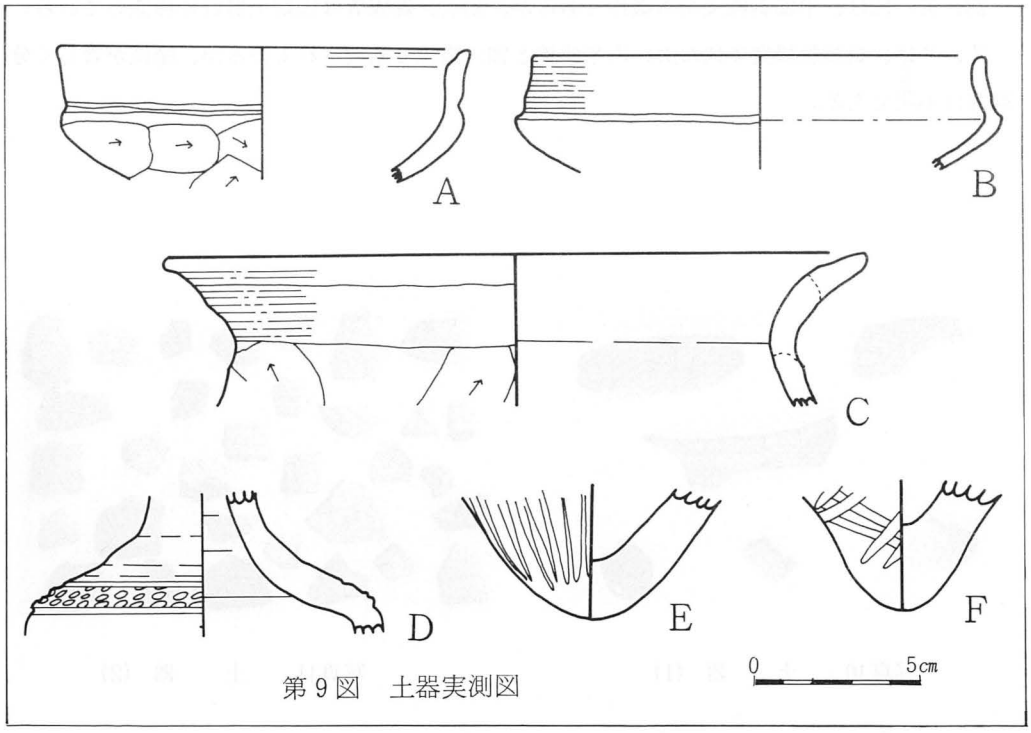
全体で、縄文土器片218片、土師器291片あまり出土した。

ここに載せた土器群は、本遺跡中に確認された遺構に伴うものではないが、実測可能資料として説明を加えるものとする。

Aは、坏で古墳時代中期鬼高式に比定できる。口縁は垂直で脛部に箆沈線で区画し、口縁部は指撫で、胴部は箆削りで左から右へと調整が成されている。色調は淡褐色で焼成は良好である。口縁部最大径は11㎝、高さ4～4.5㎝を計ることができる。

Bは、器形は坏であるが形状はAとは多少異っている。器厚は2～3㎜と非常に薄く、口縁部はわずかに内湾し、脛部に最大径を持ち、胴部へ入り極端に底部中心につながる容相を見せている。口縁部は指撫で、胴部は箆削りで調整され、器高は約4㎝、最大径は13㎝を計る。色調は淡褐色、焼成は良好である。古墳時代中期鬼高式に比定できる。

Cは、器形は甕で、口縁部のみの残存であるが、最大径は18.5㎝を計ることができる。



第9図　土器実測図

器厚は約７㎜、口縁部は指撫で、胴部は笊削りで下方から上方に向い、調整が施されている。色調は、赤味を帯びた淡褐色で焼成は良好と見られる。

Ｄは須恵器で蓋と思われる。上部と下部を欠いており器高は不明であるが、器厚は約７～８㎜を計り、最大径は約5.5㎝を計る。ロクロ成形で胎土に　２～５㎜程度の小石を含み、色調は青灰色を成し、下部に凸帯を付し、棒状工具の刺突文と思われる施文が見られる。

Ｅ･Ｆは、縄文時代早期尖底土器群に類する尖底部である。Ｅは、表面を沈線で施文され、色調は赤褐色で焼成は良い。Ｆは、押捺無節縄文を羽状に施文しており、赤褐色で焼成は良い。

次に拓影資料について説明を加える。

１～６は、全体的に沈線文による施文が成され、色調、焼成は先に述べた尖底土器群に極似していることから、早期縄文土器に相当すると思われる。

18は、単節斜縄文、20は、無節の回転押捺斜縄文が施され、いずれも前期斜縄文系土器と考えられる。

９～11は、キャタピラ状の刺突文が施され、中期阿玉台式の特徴が見られる。

12～16は、単節斜縄文と数本の太い沈線を施し、中期加曽利Ｅ式の特徴が見られる。他に、22も中期と考えられるが分類は不明である。

17、19、21、24～30、は、斜縄文及び刺突文沈縄で区画する、後期加曽利Ｂ式の特徴を現わしている。

23、31、32は、単節斜縄文系の破片であるが、胎土、焼成等は後期土器群に極似している。

７、８は、貝殻腹縁文に似た太い山形沈線と細い隆線で施文されているが、摩滅が著しく分類等は不明である。

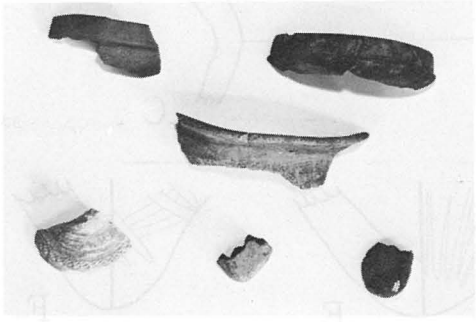
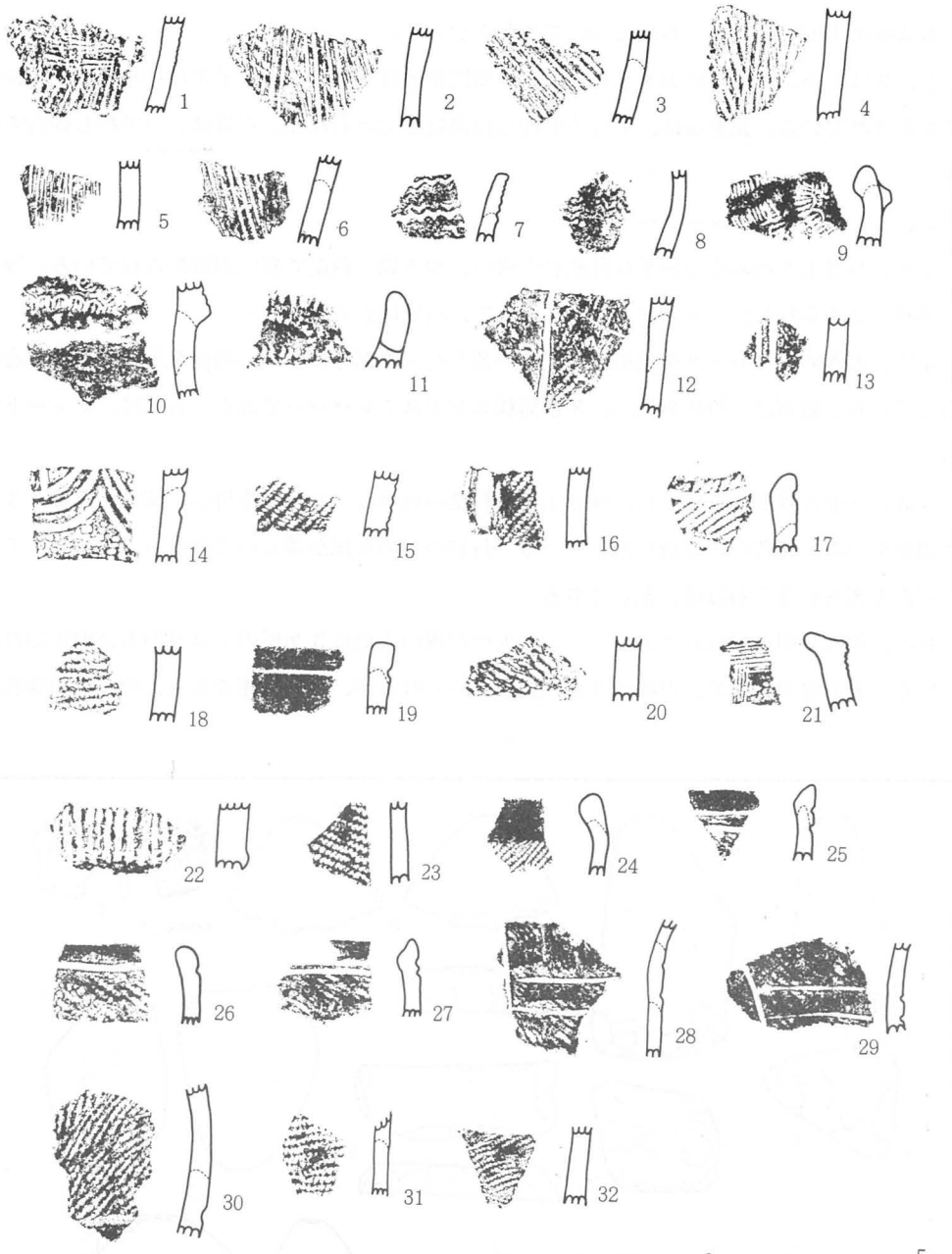


写真10　土　器（1）

写真11　土　器（2）



第10図　土器拓影及び実測図

石　　器

本遺跡出土遺物のうち、石器について説明を加える。

1、2は、ハンマー状に調整されている。堆円形の自然石の一端を平坦に打ち欠き、円錘状に成形されている。調整面は、著しく磨滅し使用痕と認められる。石質は、いずれも砂岩である。

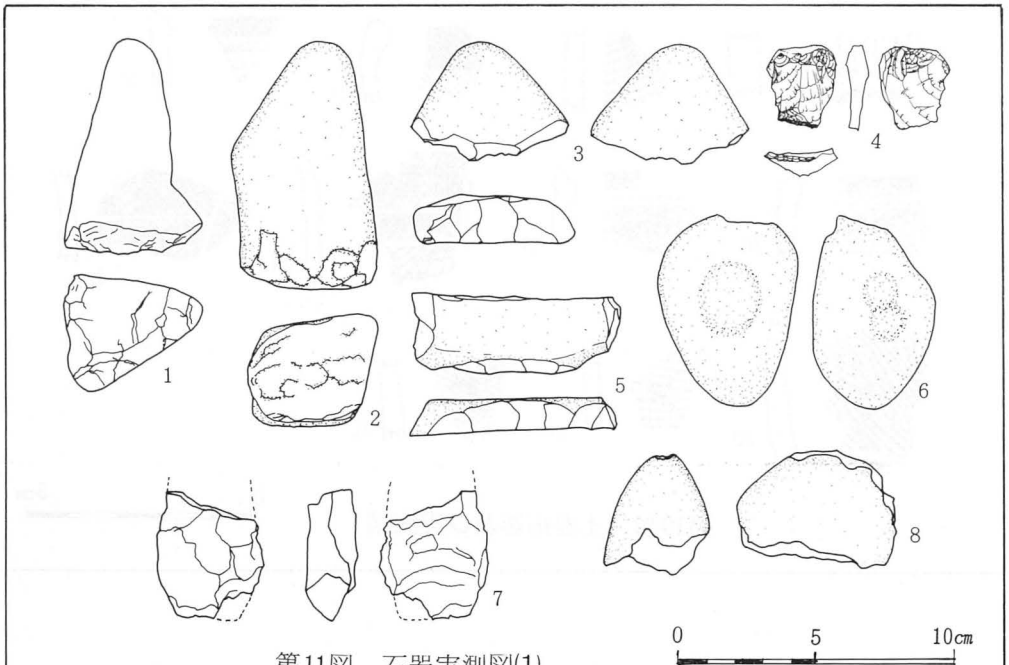
3、4、5、はスクレーパーである。

3は、厚さ1.5㎝程度の偏平な自然石を用い、やや鈍い角度で粗い剥離を入れている。細かい調整は認められない。エンドスクレーパーで、石質は砂岩である。

4は、大きめのフレークを利用し、先端の薄くなった部分に細かい調整を加え、刃部を造り出している。断面は三角形を呈し、3と同様エンドスクレーパーである。石質は、チャートである。

5は、片面に自然面を残した、厚さ1.5㎝程度の偏平なフレークを用い、切断面を除く3方に調整を加え、鈍角の刃を造り出している。長辺の刃の磨滅が著しいことから、サイドスクレーパと考えられる。石質は、泥岩である。

6は、用途不明の多孔石である。こぶし大の円礫の表面に3ケ所のくぼみが人為的に穿たれている。表面は滑らかで、円礫には焼成痕が認められるが、色調の相違から、焼成後の穿孔と



第11図　石器実測図(1)

考えられる。石質は、安山岩である。

7は、打製石斧の刃部である。調整は粗く、先端の一部と基部を欠いている。石質は凝灰岩で、全体の磨滅は著しい。

8は、半分を欠損した円礫であるが、自然面が極めて滑らかであることから、磨石として使用されていたものと思われる。石質は安山岩である。

9～13は打製石鏃である。

9は、粗い調整で、基部はほぼ直線に造られ、やや厚めである。先端部を欠損する。石質は、チャートである。

10の基部は深くえぐられ、下半部は丁重に整調されているが、先端部が鋭利ではなく、未製品とも考えられる。やや大きめで両刃部はふくらみ、先端を欠損する。石質は頁岩である。

11は、片方の基部のみの残存であるが、基部は上方に鋭利に切れ込み、調整も丁寧で薄い。

12は、小型で基部をわずかにえぐり、調整は丁寧であるが、磨滅が著しく、やや厚めである。

13は、片方の基部を欠損しているが、上方に深くえぐられ、調整は丁寧で刃部は極立っている。11、13はチャート製、12は、安山岩製である。

14～17は、小型のスクレーパーである。

14は、フレークの鋭利な一端に、細かい調整を加え、刃を造っている。石質はチャートである。

15もフレークの一端に細調整を加えたもので、黒曜石製である。

16、17は、石刃製作技法によって、剥ぎ取ったフレークで、細調整は認められないが、鋭利な剥離から、スクレーパーと考えられる。16、17は、いずれもチャート製である。

写真12　石　器（1）

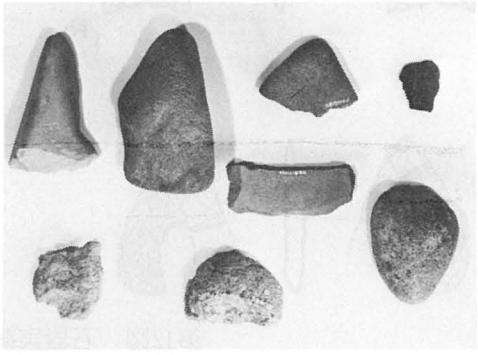
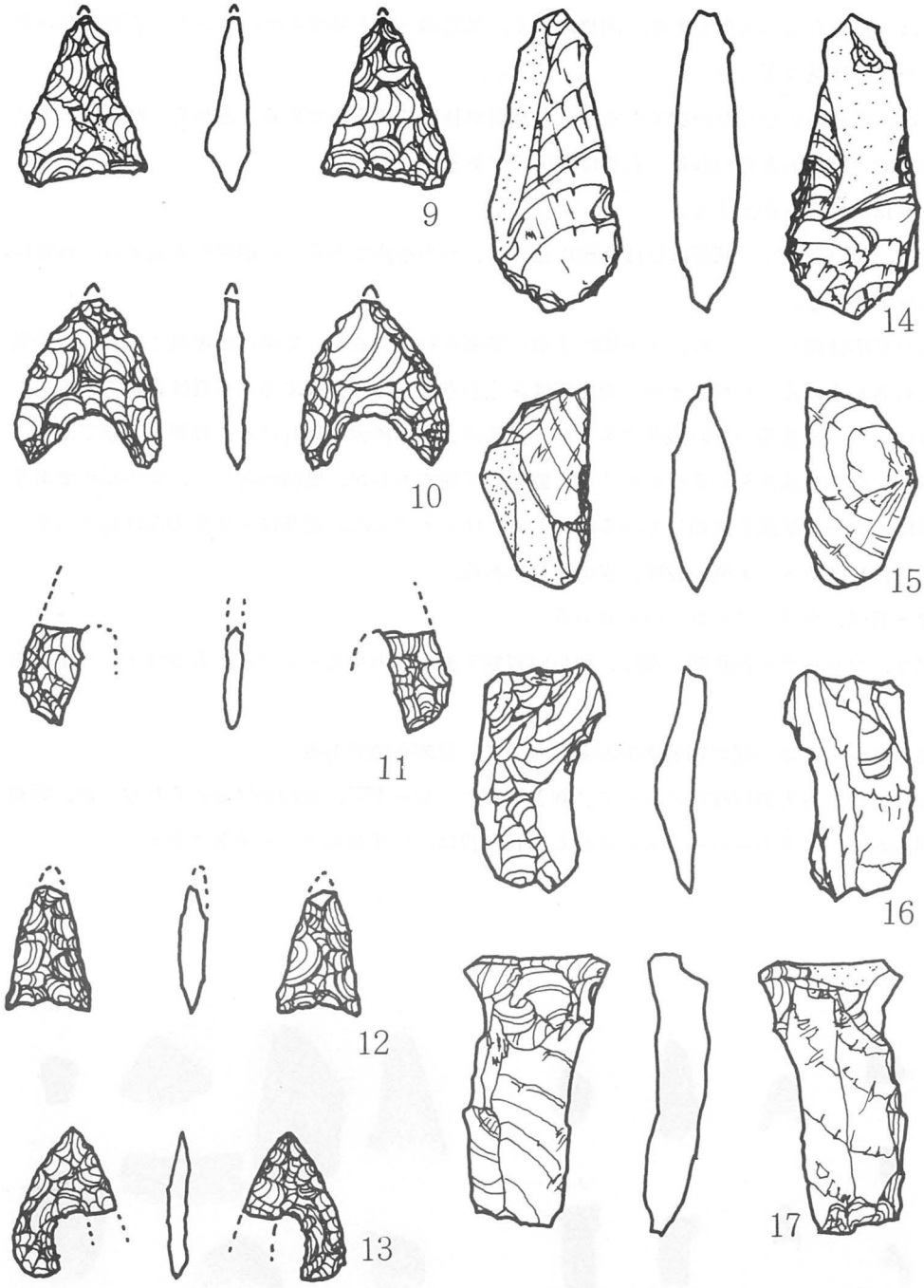


写真13　石　器（2）



第12図　石器実測図(2)

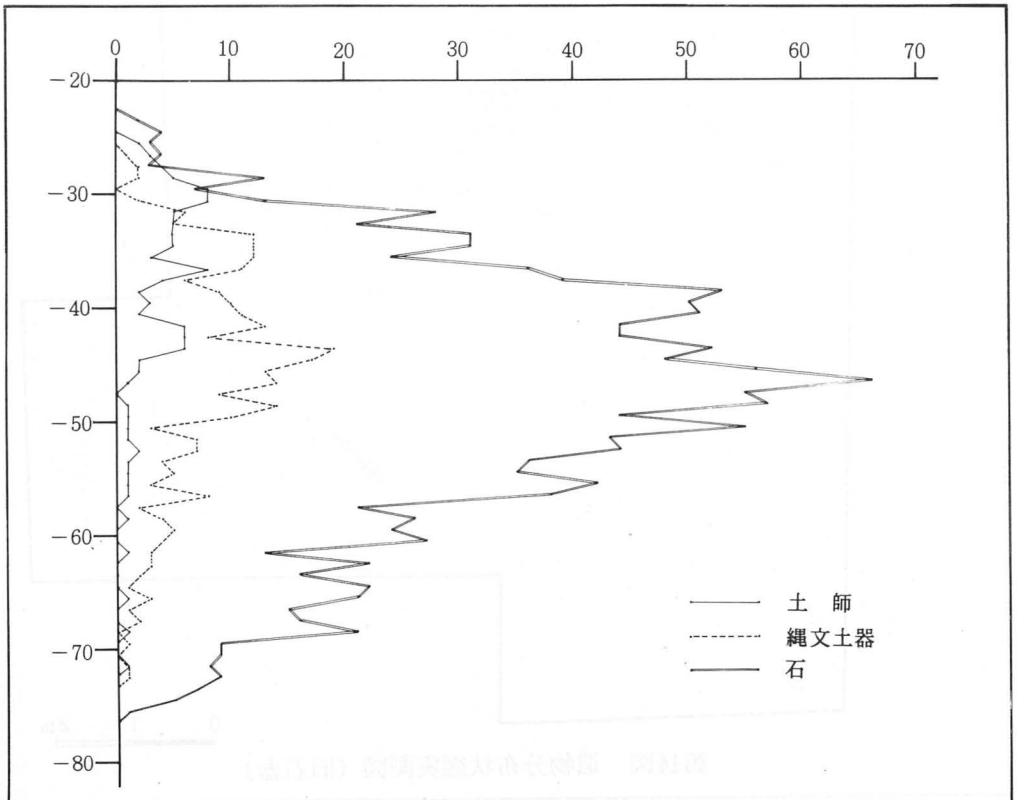
遺物の分布状態

本遺跡の遺物分布の状況は、台地上から台地肩部にかけて、4トレンチ内では縄文～土師器、石器等の分布が広く見られたが、上半層及び斜面は著しい撹乱の為、分布を追うことは不可能であった。1、2トレンチにおいては、斜面上方からの流入土砂層の直下に、ハードローム層が露出しており、分布状態を図示すること自体、意味を成さなかった。

かろうじて、褐色土層の一部とローム漸移層以下の層を残す、3トレンチ台地上と4トレンチについてのみ、記すことにする。

第13図に示した様に、土師器、縄文土器、石及び石器の出土量をレベル別にグラフに示した処、顕著とは言えないが、各時期遺物ごとにレベル差のあることが認められる。

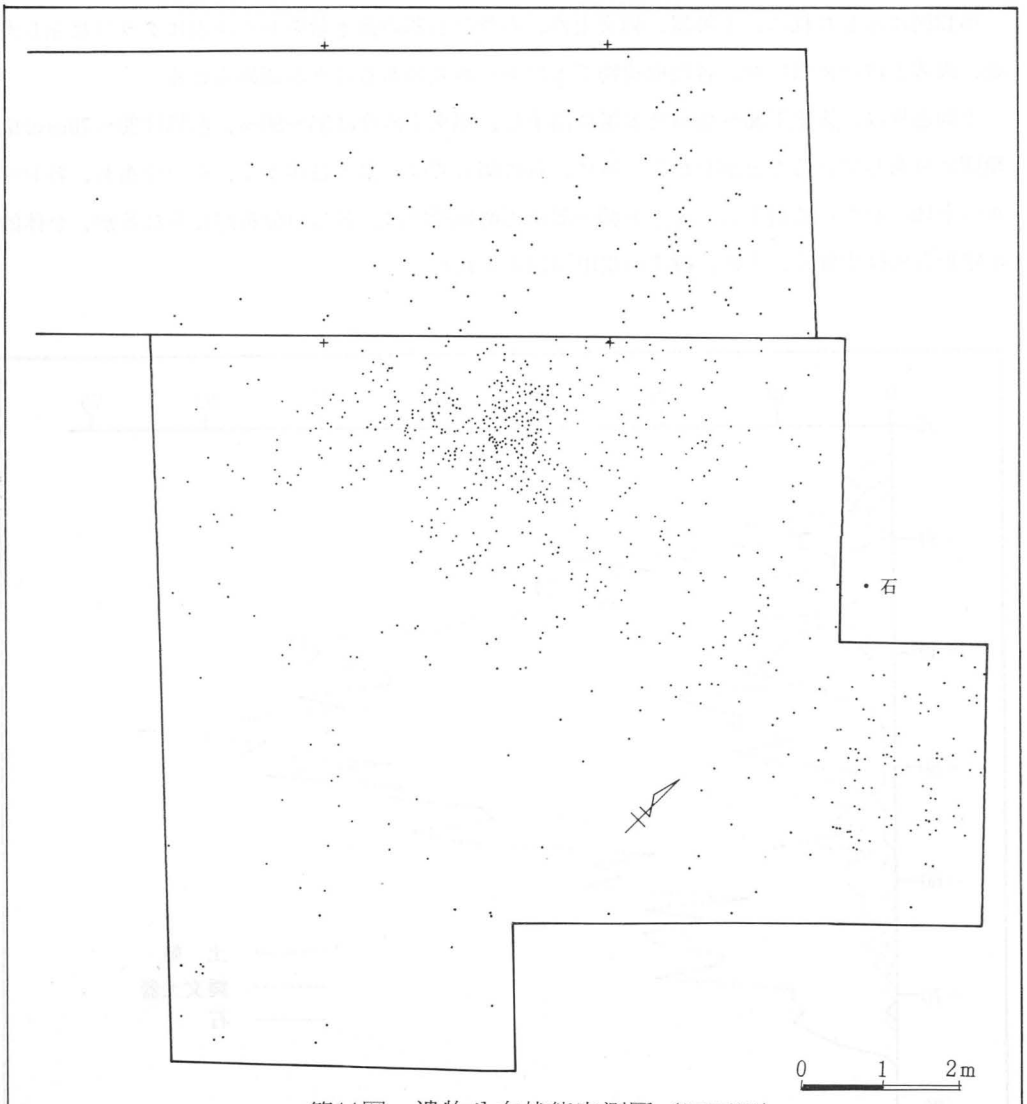
土師器片は、表土下30～45㎝で多量に出土し、縄文土器片は35～50㎝、石器は30～70㎝の広範囲に分布していることがわかる。特に、石に関しては、出土量が多く、その分布も、各レベルの全域にわたって出土し、表土下40～50㎝程度の所では、著しい分布が見られるが、全体的に定形石器は少なく、主に、礫片の集中が認められた。



第13図　レベル別遺物出土表

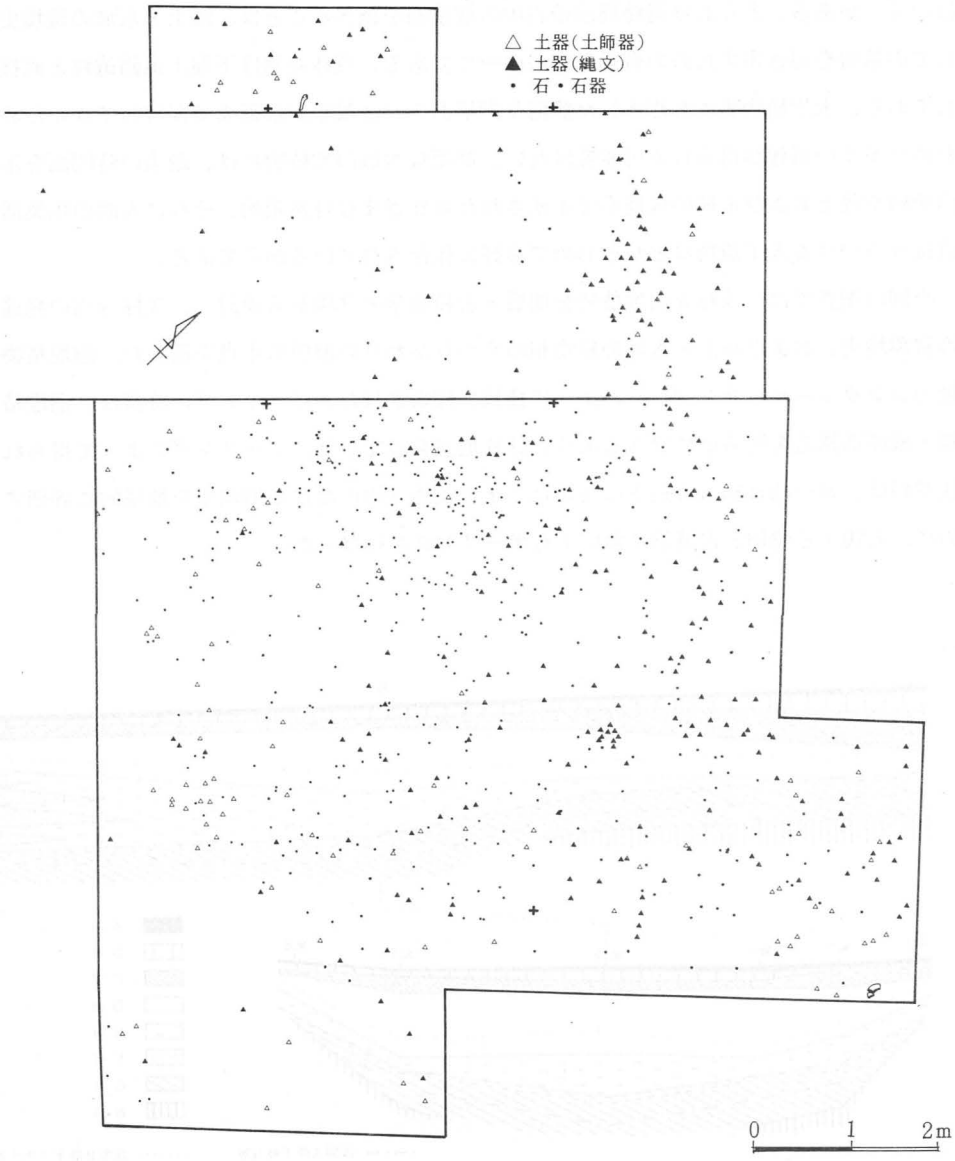
第14図、第15図には、平面での分布の状態を、層位による分類から、旧石器時代と考えられる石と、縄文時代以降と考えられる、土師、縄文土器片、石等を図示してみた。

先ず、第14図の石の分布であるが、3トレンチ、4トレンチのほぼ全域に見られるが、特に4トレンチ北西の3トレンチ寄り部分に顕著な集中が見られる。範囲は3 m四方程度であるが主に礫片、円礫、大型のフレーク等が、多数出土している。調査中に、周辺に焼土粒子のわずかな点在を見たが、遺構は全く確認できなかった。円礫が特に多く出土したが、そのほとんどに、焼成を受けた跡が、顕著に認められた。



第14図　遺物分布状態実測図（旧石器）

第15図は、土器、石の分布であるが、縄文土器は3トレンチ1～0G周辺及び4トレンチに全域に分布している。土師器片は、4トレンチ、北拡張部及び南壁よりに多く分布しているが、南壁寄りの分布は1号住居址の覆土調査が不可能だった為伴っているものかは不明である。土器はそのほとんどが小破片であった。



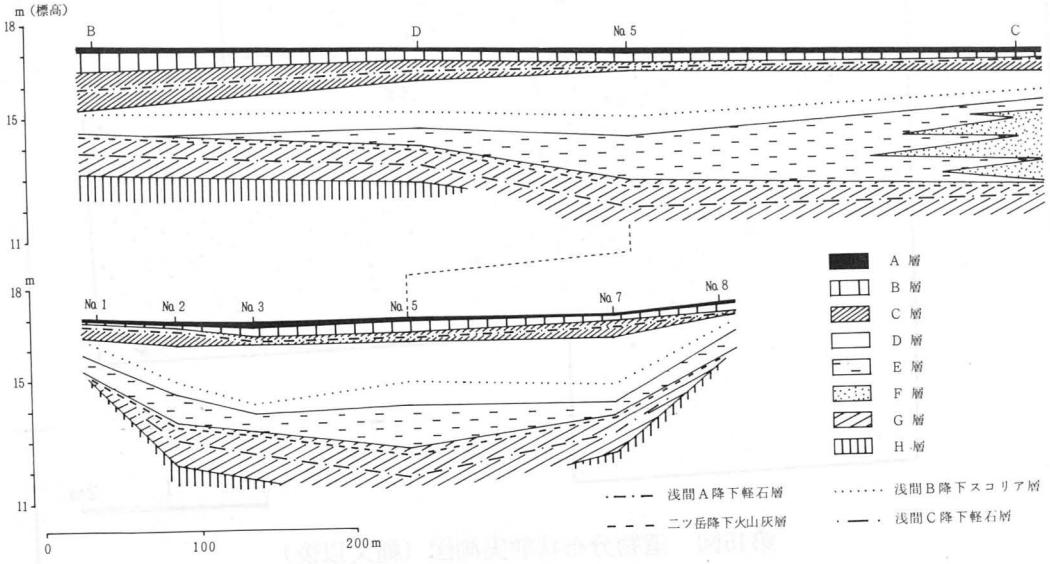
第15図　遺物分布状態実測図（縄文以後）

第Ⅳ節　遺跡をとりまく環境

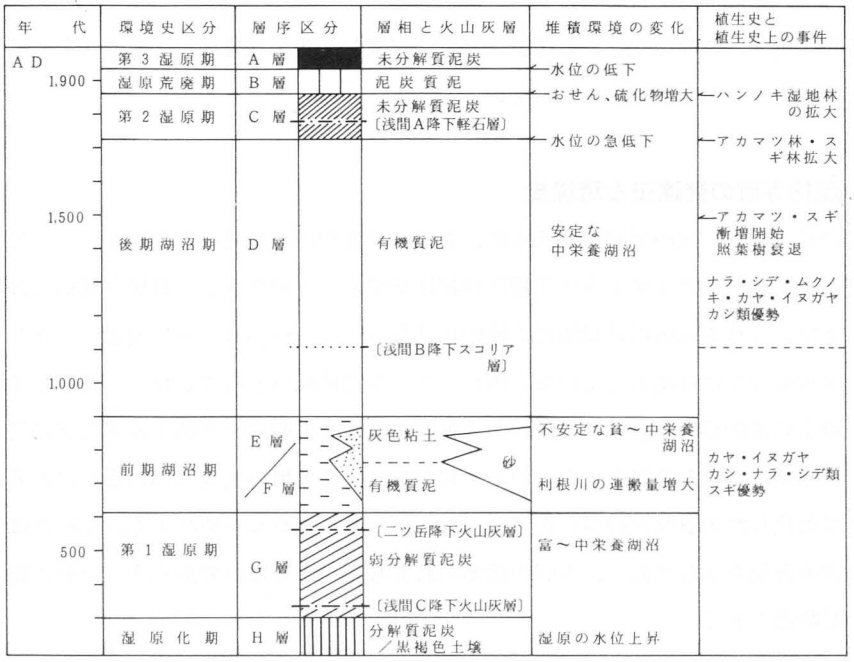
方法と経過

先史あるいは歴史時代の人類がどのような環境下で生業活動を営んでいたのか、また各時代を通じて起きた環境の変化に対して人類がどのように対応してきたのかを明らかにする方法にはいくつかある。とりわけ遺跡周辺の谷中の堆積物を調べることは、陸上・水域の環境史に関しての情報を導き出すための有効な方法の一つである。茂林寺沼は下堀工道満遺跡と直接に接しており、水生植物相にも恵まれた静隠な湖沼あるいは湿原が最近まで存続してきたため、きわめて多くの情報が得られる可能性は高い。静隠な水域の堆積物には、過去の時間面を示す火山灰層や陸上および水域の環境系で生産されたさまざまな自然遺物、それに人間の生業活動を直接うらづける人工遺物などがきわめて良好に保存されているからである。

今回の調査では、茂林寺沼堆積物を地質・古植物学の立場から検討し、茂林寺沼の発達史と堆積環境史、および陸上・水域の植物相のうつりかわりの解明に重点を置いた。沼堆積物は手動のシンウォール・サンプラーによって柱状に採取された。ボーリングの位置は、沼堆積物の横・縦断面構造を明らかにできるように計9地点を設定した。ボーリングによって得られた柱状試料は、のべ42ｍ80㎝の長さに及んだ。また茂林寺沼における環境史を地域的に評価するために、近接する蛇沼と古城沼においてもボーリングを行なった。



第16図　茂林寺沼の縦断、横断地質断面図



第17図　茂林寺沼の自然史

茂林寺沼堆積物の層序

沼堆積物の横・縦断面図を第16図に示す。両断面図の交点No.5は、沼中央を通る遊歩道沿いに位置する。堆積物は図示するようにA層からH層の8層に区分できる。各層の境界がかなり時間面的性格を持つものとして、G層とF層の境界、C・B・A各層のそれぞれの境界があげられる。最下部のH層は黒色の粘性の高い分解質泥炭あるいは土壌からなり、湿原あるいは湖沼成堆積物とは言いがたい。谷奥部でのH層ははっきりした黒褐色土壌に変化するので、H層下には不整合が存在し、H層はそれをおおう最初の堆積物と判断される。E層は湖沼成の泥・粘土、下層は河成の砂からなるが、両者は堆積相の違いを反映したもので同時異相の関係にある。

H層下の不整合形成期は、後述するようなH層の推定堆積年代や蛇沼・古城沼のボーリング資料にもとづくと、少なくとも弥生前半期は入るものと考えてよいであろう。その頃、茂林寺沼の谷奥部はもとより大半の部分が離水していたと考えられる。したがって、当時の人間の生活の場は現在沼に埋没している谷中にまで考慮されなければならないだろう。

茂林寺沼堆積物には顕著な4層の火山灰層が挟在する。鉱物組成や軽石の形態など岩石記載的性質にもとづいね、下位より浅間C降下軽石層、二ツ岳降下火山灰層（FA）、浅間B降下

スコリア層、浅間A降下軽石層に対比された。考古遺物層序や古文書からそれぞれの降下年代は、4世紀前半、6世紀中ないし後期、1108年（天仁元年；弘安4年とする説もある）、1783年（天明3年）であることがわかっている。

茂林寺沼の発達史と環境史

上記の基本層序、火山灰層の降灰年代、および堆積物の諸性質の観察にもとづいて、茂林寺沼の発達史を第17図に示すように7期に時期区分することができる。H層が堆積しはじめてから今日まで、茂林寺沼の堆積環境は大略的には湿原ー湖沼ー湿原の順に変遷してきた。

最初の湿原化期には離水していた谷中がしだいに堆積域へと変化した。年代を示す資料はないが、直上の浅間C降下軽石層の年代から推定すると弥生時代後半頃とみるのが妥当である。

第1湿原期は顕著な2層の火山灰層の年代から、ほぼ古墳時代全部が入るものと考えられる。泥炭層は炭化した木質材片の多い泥炭からなり、かつハスやヒシを産する。これらは中栄養から富栄養の湿原を示しており、人間の活動の影響も無視できないであろう。一般に硫化物量が多いのも特徴である。

第1湿原期から前期湖沼期への移行は急激である。これは地質断面図から明らかなように、利根川水系の活動によって茂林寺沼の谷口に砂のバリアーが形成され、急激な水位の上昇とそれにともなう湖沼化が原因している。特にこの時期の後半は河川の影響を強く受けたとみられ、E層上部は下部に比べ無機物量が多く、ふつう粘土からなる。しかし、堆積相の変化は著しく、不安定な貧あるいは中栄養湖沼であったと考えられる。

後期湖沼期は安定した中栄養湖沼の時代である。利根川水系の活動の影響を受けない独立した湖沼へと移行した。浅間B降下スコリア層降下後は特に無機物量も少なくなり、藻類や高等水生植物群も豊富であったことが顕微鏡下の観察からうらづけられる。後期湖沼期は約900年から1700年までの約800年間にわたるが、谷奥部では年代がかなり古くなる。これは谷奥部が河川の影響をほとんど受けることがなかったためである。

第2湿原期と第3湿原期はともにヨシの急速な分布拡大と大繁茂によって特徴づけられる。第2湿原期のはじまりは、谷奥部を除いては浅間A降下軽石層降灰（1783年）の若干前である。この頃、後述するようにスギ・アカマツが急増しており、この変ぼうが人間の活動と深いかかわりを持つことが示唆される。2つの湿原期にはさまれる湿原荒廃期には、硫化物の流入がきわめて増大し、人間の影響が強くあらわれる。これら3つの時期を通じて、水生植物相は急速に貧弱化し、ヨシ遺体の埋積と平行してハンノキ湿地林が拡大した。このような変ぼうは人間の活動をぬきにしては説明しえないものであろう。

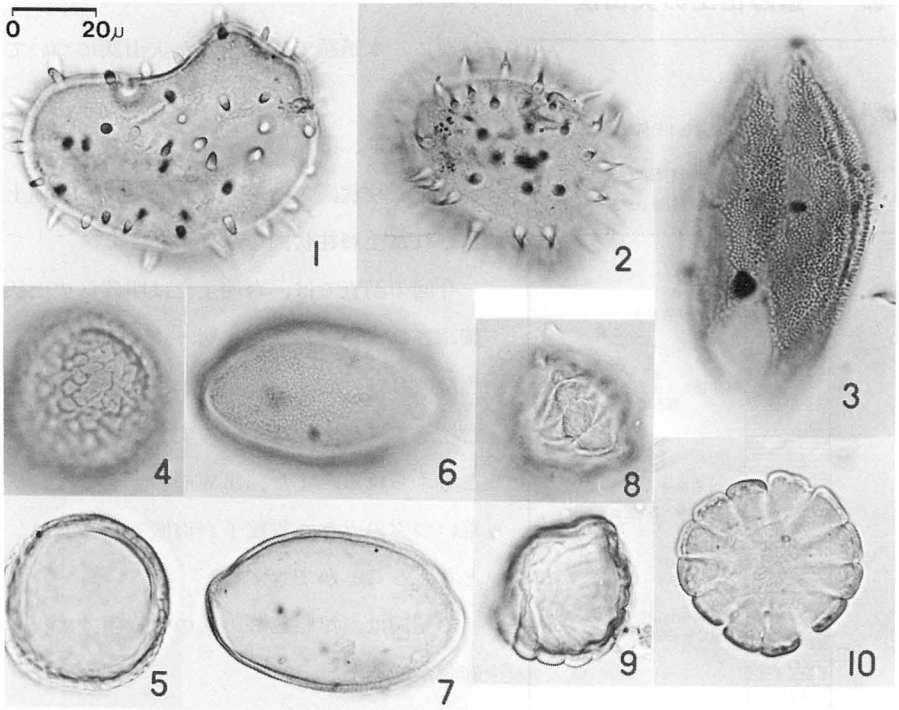


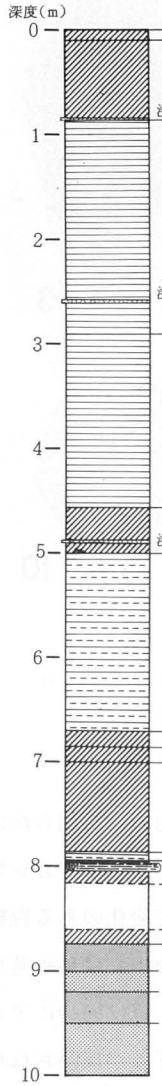
写真14　茂林寺沼の後期湖沼期に栄えた水生植物花粉　1, 2 コオホネ　3 クロモ
4, 5 ヒツジグサ　6, 7 ジュンサイ　8, 9 ヒメタヌキモ　10タヌキモ

植物相のうつりかわり

花粉分析の結果から、第17図に示したように周辺の森林植生の変化がおおむね明らかになってきた。浅間B降下スコリア層降下以前の森林は、カヤ・イヌガヤ類のほかスギやカシ類が比較的目立った要素であった。これらにナラ類などの落葉広葉樹が加わって変化のある森林植生をつくっていたと考えられる。その後、主要素であったスギとカシ類は衰退しはじめ落葉広葉樹の優勢な森林へと移行するが、約1,500年頃に再びスギが漸増開始し、ほぼ同時にアカマツも漸増開始が認められる。これらの変化は大なり小なり人間の植生への干渉が反映されたものとみることができる。第2湿原期のはじまりと同時にアカマツ・スギが急激に増加した。これは人間の森林破壊よりむしろ植林の結果ではなかろうか。

茂林寺沼の水生植物相は後期湖沼期においてもっとも豊富であった。コウホネ、ジュンサイ、ヒツジグサ、タヌキモ、ヒメタヌキモ、クロモ、ガガブタなど沈水・浮葉植物が大半を占め、とくにジュンサイは大繁茂していたと考えられる。これらの水草類は特に湿原荒廃期に入って量的にも種類数においても減少し、今日まで一方的に衰退の途をたどった。後期湖沼期に栄えた主要な水生植物の花粉化石の顕微鏡写真を写真14に示した。　（辻　誠一郎）

第Ⅴ節　遺跡出土の火山灰



第18図　茂林寺沼の土層柱状図

次に、本遺跡で確認された火山灰についてあげてみたい。

第18図は、湿原部第　地点の機械ボーリングに伴う土層柱状図である。又19図には、台地上で確認された土層柱状図をあげた。

今回の調査では、台地上では明確な火山灰は確確認されなかった。第Ⅰ層～第Ⅲ層中には、白色ないしは、黄白色の粒子が、含まれているため、台地上では火山灰はすでにすき込まれているものと考えられる。また、第Ⅶ層の土面では、比較的荒いつぶのガラス質粒子が肉眼で観察され、ＡＴと考えることができよう。

第18図は、湿原部分のもので、明確に火山灰の確認ができた。

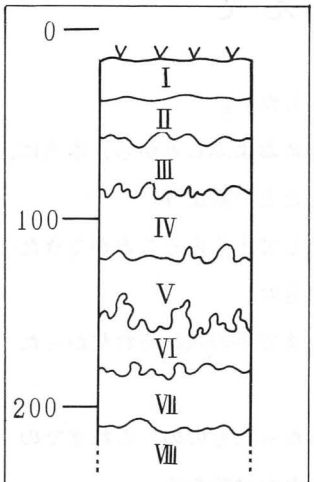
その鉱物組成や色相、形態から見て、現湿原面から約１ｍ内外の所に、浅間Ａ軽石層（Ａ）が、表土下約2.5ｍのところに、浅間Ｂスコリア・軽石層（Ｂ）を、約５ｍのところに、浅間Ｃ軽石層（Ｃ）を確認することができた。

またこの柱状図中にはないが、表土下4.5ｍ付近、暗褐色泥炭層中に、榛名二ツ岳火山灰層（ＦＡ）が確認できるわけである。

ただこの柱状図は、機械ボーリングのため、やや不安定なものであり、手動によるシンウォールの柱状図（縦断面図・16図）をも参考にされたい。

火山灰の厚さは、いずれも薄く、浅間Ａ軽石層が約３㎝、同Ｂスコリア・軽石層が約３㎝、同Ｃ軽石層が約４㎝程の堆積でしかない。

比較的、遺存状態の良い湿原部での厚さがこの程度であることより台地上では、ほとんどといって良いほど確認できないものであろう。



第Ⅰ層(暗褐色)表土層
第Ⅱ層(　〃　)現代の造成撹乱層
第Ⅲ層(　〃　)粘性有、締り強
第Ⅳ層(褐色)　ローム漸移層
第Ⅴ層(明褐色)ソフトローム層
第Ⅵ層(黄褐色)ハードローム層
第Ⅶ層(暗褐色)暗色帯
第Ⅷ層(　〃　)ローム層

第19図　台地上土層柱状図

これまでの発掘調査において、台地上で確認されたものに、大袋Ⅱ遺跡の土坑から浅間C軽石層（C）、大袋Ⅰ遺跡溝状遺構址から浅間C軽石層（出土遺物との関連から浅間Bスコリア・軽石層ではなかろうか？）が上げられる。

本遺跡確認の火山灰の特徴を上げるならば、浅間A軽石層（A）は、灰褐色、粒度0.8～1.2㎜、発泡状況良好である。

浅間Bスコリア・軽石層（B）の色調は　　色、粒度　1.5　㎜、発泡状況は良

また浅間C軽石層（C）は、色調灰黄褐色、粒度0.1～0.3㎜、発泡状況良

又これらの降下年代は前述にもある通り、浅間A軽石層1783年、浅間Bスコリア、軽石層が1108年、浅間C軽石層が4世紀前半である。これにより、湿原中の時代設定が可能となったわけである。

以上が本遺跡で確認された火山灰であり、この鑑定は、群馬大学新井房夫教授によるものである。

群馬県は、火山県とも言われ、考古学上において、遺跡で発見される火山灰から、その研究も活発である。しかしながら、館林地方では、この堆積状況が、ほとんど確認されていなかったため、今回の調査で、初めてその確認ができたことになる。今後の発掘調査において、十分活用して行きたいと考える。

写真15　　調　査　風　景

写真16　火山灰のサンプリング

第Ⅴ章　まとめにかえて

最後に、本発掘調査で確認されたこと、問題点をあげてまとめとしたい。

今回の発掘調査は、遺跡台帳（昭和48年刊）で、遺跡が湿原部分におよぶことから、本当に、湿原部に遺跡が存在するかどうか確認することから調査がはじまったといえよう。

台地上での遺跡存在は、これまでの発掘調査から、明確に事実としてとらえることができたが、低地部分においては、遺跡存在はありえないものと考えられてきた。

今回の調査は、湿原部に遺跡が存在するかからはじまって、これまで手の入れられなかった湿原部へ初めてメスを入れたわけである。

台地での発掘調査では、遺構等明確に人間生活を示す根痕は少なかったものの、これまでの調査通り、旧石器時代～現代までの人間痕跡を確認することができたわけである。

又、調査においては、台地斜面部分まで遺物等の確認がなされたわけである。

湿原部分にあっては、明確に人間生活の痕跡は、確認できなかったものの、茂林寺沼の縦・横断面でみられるように、テラス状のはり出しが確認され、土層状況とあわせて、人間生活痕跡の可能性が読みとれた。これにより、本地域では、その可能性はうすいものの、谷田川、矢場川流域の自然堤防下には、その可能性が大きく残されている。

これは、現在台地上で確認できない弥生時代～古墳時代の遺跡が、充分に、台地下沖積地下の谷のテラスに広がる可能性があるということであり、特に、自然堤防や埋没したであろう、低い台地では十二分に考えられるということである。

このようなことから、現状では、深くねむるこれらの遺跡の調査は不可能に近いが、今後、掘削深度の深い開発行為では注意していかなければならないであろう。

また今回の調査では、湿原部の遺跡確認に端を発して、前述の通り、さまざまな内容について、メスが入れられたわけである。そして、それを解明するための数多くのデーターが集積されたといえよう。

しかし、時間的なものから、その分析は十二分に行い得ていない現状にある。このため今回の報告では、一部のみの報告となったが、今後そのデーターを精査することで、茂林寺を含む館林の人間をとりまいていた環境の変遷について、再度明確にしていきたいと考える。

最後に、調査にあたり、心よく御協力下さいました、新井・辻両先生をはじめ、作業員の皆様方、各方面の皆様に心からお礼申し上げるとともに、御教示・御指摘いただければ幸いです。

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第７集

館林市大字堀工

下堀工道満遺跡

発掘調査報告書

発　　行　　館林市教育委育会

印刷所　　中塚印刷所

発行年月日　　昭和５９年３月３１日

文化財愛護シンボルマーク

ふる郷の文化と歴史を見なおそう